

『明治150年—福澤諭吉と現代』

拓殖大学学事顧問、前山梨総合研究所理事長
渡邊 利夫氏

どうもご無沙汰してしまいました。前々回は暴風雨にたたられ、前回は雪にたたられまして、今日になってしまいました。こんなタイトルのお話でもよろしいかと波木井先生に問うたところ、掉尾を飾るのに相応しいテーマではないかということで、今日を迎えました。

福澤諭吉という人物には、相当長い間、深い関心を持って参りました。もちろん専門的に勉強したことではないのですが、時間をみては文章を読んで、そのリズムカルな調子に乗せられた福澤読みの一人になっています。

福澤諭吉という男は、幕末の33年を生き、明治維新を迎え、それからまた33年生き、66歳で生涯を閉じた男です。まさに激動の時代を生き長じては、毎日のようにものを書いてきた人物です。特に後半生は『時事新報』、今の産経新聞に繋がる淵源を持つ新聞を自ら創刊して、その社説を毎日書いていたので、膨大な量の文章が残されています。岩波書店から全22巻の福澤全集が出ております。1巻だけでも何百ページもあります。この人物について、私自身が抱いているところのものを今回は少し思い切って話させていただきたいと思います。

多くの人々がもたされている福澤像は、戦後の左翼リベラリズムが「造作」したものです。我々が毎日使っているこの一万円札の肖像ですね。まあ一万円札の肖像画になるような人気者なわけですね。ですが、私がみる福澤像は、世に一般的な福澤像とはかなり違うということを主張してみたいのです。私のように福澤をみることによって、現代における福澤の価値というものが一段と大きくなるのではないかという結論に持っていきたいと思っております。

どうなのでしょう。福澤といえば、レジュメの一番冒頭に書いてあるように、「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」（天賦人權説）、この主張者・主唱者であるというイメージはおそらく皆さん持っておられるだろうと思いますね。そしてもう少し詳しい方は二行目、「政府は国民の名代にて、国民の思う所に従い事を為すものなり」という表現をみたことがあろうとも思います。これは社会契約説といわれてい



ます。ルソー流の社会契約説を漢文風に置き換えた名文です。商人や農民が税金を払うのと引きかえに政府は、国民の財産と生命を守る、そういう契約の下に社会が成り立っている。そういう社会思想ですね。これはフランス革命の基礎になった思想でありますが、こういうことを主張した人物が福澤である。つまり天賦人権説、社会契約説を説いた人物としての福澤というイメージが我々は非常に強かろうと思うのですね。

それからもう一つ、福澤像を決定づけたと思われるフレーズがあります。これもご存知だと思いますが、「門閥制度は親の敵で御座る」。最晩年にオーラルヒストリーとして出した「福翁自伝」の中にこの言葉が載っている一言です。大体この3つくらい皆さんご存知だろうと思うのですが、こういう極めて特徴的な短文で福澤像が語られ、中学校や高校の教科書などにもそういう人物として彼は取り上げられています。「門閥制度は親の敵で御座る」というのは特にメッセージ性が強い文章ですよ。これはこういう文脈の中に出てきます。

「父の生涯、四十五年のその間、封建制度に束縛せられて何事も出来ず、空しく不平を呑んで世を去りたるこそ遺憾なれ。又初生児の行末を謀り、これ之を坊主にしても名を成さしめんとまでに決心したるその心中の苦しさ、その愛情の深さ、私は毎度この事を思い出し、封建の門閥制度を憤ると共に、亡父の心事を察してひと独り泣くことがあります。私の為に門閥制度は親のかたき敵で御座る」。

福澤の父は百助といいます。この百助は中津藩、つまり今の大分県の中津の辺り、中津藩という小藩があったのですが、その藩の中では他に敵うものがないといわれるほどの漢籍の読みだったらしい。漢籍のレベルにおいては他に敵うものがないレベルにまで達しながら、しかし、出世することが出来なかった。大阪の堂島に中津藩から藩の米を送られてきて、それを自給のため使ったり販売したりする、その会計をやっていた人物が百助です。廻米方という下っ端役で生涯を終わってしまったのです。論吉が生まれて何とかこの子を立派に育てようと思うのですが、何しろ士族の一番下ですね。ですから何をしようと出世というのは不可能だ。そこで坊主にしようとしています。どうして坊主にしようと考えたかという、僧職だけは実力によって位を上げることができる。だから寺の坊主にしたい、とまで言ってくれた。そしてこの言葉です。「門閥制度は親の敵で御座る」、そういう旧社会への不満をストレートに表した言葉が入っているわけです。そして親の仇を討つために、西洋の学問を勉強しなければということになって、長崎へ行って蘭学を勉強する。しかし、やっぱり次の時代は江戸だと考えて、東海道を江戸の方向に向かって歩くわけですが、途中ひょんなことから大阪で緒方洪庵という大変な蘭学者が開いた適塾（適々斎塾）という私塾に立ち寄り、そこに寄寓しながら大きな実力を得ていきます。そして緒方洪庵の引きにより、適塾のトップクラスの門弟となって、そして知識人の道を歩み始めたのです。そして江戸に行きます。江戸に行ったところ蘭学なんて全然役に立たなかったようです。オランダ語

で話しかけても答える人は誰もいない。横浜に行けば何とかかなろうと横浜に行ったのだけれど、一人だけしかオランダ語のできる日本人はいなかったそうです。それで町を見てみると、みんな英語の看板だということで、やはり英学の時代だということ在那里で悟るわけですね。そして蘭学から英学へ転じたというわけでありまして。先程言ったような文章を次々と発表していくわけですね。ですから福澤という人物が、天賦人権説や社会契約説をもとに、近代日本の思想形成に非常に大きな貢献を成した大思想家である、そういうイメージが、定着してしまったというふうに思います。つまり我々が見ている福澤というのは、文明開化論者であり、あるいは欧化主義者であり、啓蒙思想家、とこういうイメージなのではないでしょうか。

私は慶応義塾大学の出身ですが、やっぱりそういうイメージをずっと抱かされておりました。しかし、ある頃から偉大なる思想家であればもっとももっと多面的で重層的な思想を持っているはずだ、一面だけを切り取って、さあこれが福澤だよという教え方、これがいかかわしく思えて、福澤の別の面を見ようと務めてきたわけです。

私が大学に入った翌年、安保闘争があり、それからしばらくしてから全共闘運動というのがありました。大体その時代の左翼リベラリズム的な傾向というのは、私は肌感覚で知っています。後年考えてみると、一般に受け取られている福澤論吉像というのは、そういう左翼リベラリズムの時代が、あるいは左翼リベラリズムの下で学んだ人たちが造作した一つのイメージではないかというふうに考えるようになりました。日本近代史や日本思想史などをやっている人たちはそういう一面しか見ていない、あるいは少なくともそういう一面しか書かないという傾向があるわけです。そういう傾向を持った人間からすれば、自分の思想的な淵源が福澤という大きな権威にあるのだと言いたげな、少々さもしい感じを私は持ったわけです。

そこで既製品ではない福澤像をなんとか紡いでみたいと思ったわけです。世に一般的な福澤像との対極を鮮やかに浮かび上がらせている論説がありますから、これを紹介すれば、ああ私がそのように考えるのも無理はないなと思ってくださるかもしれません。

少しショッキングなエッセイですが、そこに引用してあります、「瘠我慢之説」。明治 24 年の論文です。これは榎本武揚と勝海舟に対する徹底的な罵詈雑言に近いような、文章であります。皆様の中にももしかしたら榎本ファンや勝ファンが結構おられるだろうと思いますが、福澤はこの二人を憤懣やるかたないという調子で、次のように書いています。ご存知だろうと思いますが、念のために文脈上ちょっと申し上げておきますと、榎本武揚というのは、徳川の幕臣であります。オランダ留学を経て幕府の海軍副総裁、明治維新に際しては函館の五稜郭に立てこもって官軍に抵抗した男です。そこで逮捕、拘束、江戸に護送されて禁固刑を受けるのですが、すぐに赦免されまして明治政府に取り入れられ、とんとん拍子で出世して、最後には海軍長官、外務大臣、

枢密院顧問官というふうには位人臣を極めた男です。

勝海舟は、これも言うまでもなく、徳川の幕臣であります。やはり蘭学に秀でた人物で、幕府海軍の奉行を務めます。有名なのは、江戸の薩摩屋敷に西郷隆盛が入ってきたという報を受けるや、勝海舟はそこに駆けつけて、例の有名な江戸城無血開城の談判をして、これに成功したという人物です。それから大政奉還にも大変功績のあった人物です。薩長による明治新政府が始まってしばらくしてからやはり新政府に出仕してこれも位人臣を極めた男です。

つまり徳川幕府の要職にあった人物が、徳川幕府を倒してできた新政府に仕えて位人臣を極めるなどということが、許されるかというのが福澤の問いなのですね。「士は二君に仕えず」というのは、武士ならば必ずや擁していなければならない最低限の徳義である。この徳義を平然と破った者がこの二人である。「人生というのは痩せ我慢が必要なのだよ」ということを説いた論説が「瘠我慢之説」です。「あの福澤がこんなこと言うのかい」というような気分で聞いてくださっているかもしれませんが、そのとおりであります。

これは明治 24 年の論説で「時事新報」に載った論説ですが、いろいろな想像力を掻き立てる実に面白い論説だと思います。あちこちに散らばっている資料を結び付けて、私は次のようなストーリーを考えているわけです。

福澤は明治 4 年の秋に、東海道をとぼとぼと南に下って歩いていたらしいのです。駿府城をめざしてですね。今の静岡駅の前に駿府城があります。徳川藩は駿府城に移封されているわけですね。確か 800 万石ぐらいあったのが、70 万石ぐらい減らされていたのですが、どうにか家来を養っているという感じですね。駿府城に移封された徳川幕府が今頃どんな具合になっているのかを福澤は知りたくて、東海道を下に下って行ったらしいですね。その途中に、清水港に近いところに興津がありますよね。興津清見寺というお寺さんに福澤は立ち寄るのですね。そこへなぜ寄ったかということには「咸臨丸殉難諸氏記念碑」があると聞かされていて、お線香を手向けたいということだったらしい。ご存知かもしれませんが、咸臨丸という船は日米修好通商条約の調印のために渡米する日本政府の団員を載せたボータハン号という艦船を護衛していた船なのです。木製のちゃちな帆船です。よくこれで護衛に向かったなと思わせるほどの船です。ちょうど福澤諭吉と勝海舟もそれに乗っていたのですね。この咸臨丸は、務めを終えて日本に帰ってきて、その後は、幕府の運搬船として清水港辺りで活動していたらしいのです。ところがその船は薩長軍によって攻撃されて、乗員 7 人が死んでしまいました。ところが倒幕軍を恐れて誰もその 7 人を船から引き出してやらなかったそうです。そこで侠客清水の次郎長、山本長五郎がその手下を使って、その 7 人を引きだし、興津清見寺町に葬ってやり、そこに後日、咸臨丸殉難諸氏記念碑が建てられたという次第です。

線香をあげた後で、福澤はふと、その碑の後ろに回ってみたというのです。そこにこう刻印されてあるというのです。「人の食を食む者は、人の事に死す」。つまり徳川家の幕臣として仕え、禄を食んだ者は徳川家のことに死すべきだというわけです。そのライターは誰かという、「従二位榎本武揚」とこう書いてあるというのです。榎本武揚という男は、江戸城開城の日に軍艦8隻を率いて品川を脱出して函館に入りますよね。そして五稜郭に行って、そこに蝦夷地政府というものをつくります。しかし官軍の猛攻を受けて降伏してしまいます。無数の部下をそこで死なせてしまいました。ところが自分はなんとか死を免れて東京に護送されました。そして先程言ったように禁固刑を受けたのですが、赦免を受けて、これを皮切りに明治新政府で北海道開拓使を皮切りに文部大臣、枢密院顧問、文部大臣、外務大臣、農商務大臣などという実に華麗な経歴を持ちました。函館で榎本に従って官軍への投降を拒否し無残な死を遂げた兵士をそのままに、自分は新政府に仕えて位人臣を極めるなどということが許されていいはずがない、と福澤はいうのです。

後世に残る石碑にそんなことを刻み付けていいはずがないと福澤は思ったのです。恐らくは、この辺はイメージネーションですが、怒気を含んだような気分を納めることができないまでに、駿府城に行かずに踵を返して、江戸三田の自分の屋敷に立て籠って、この一文を書いたような気がするのです。そういう気分がダイレクトに出ている銘文ではないかと私は思うのです。

「榎本武揚について」というところを見てください。「成ればその榮譽を専らにし敗すればその苦難に当るとの主義を明にするは、士流社会の風教上に大切なることなるべし。即ち是我輩が榎本氏の出处に就き所望の一点にして、独り氏の一身の為のみにあらず、国家百年の謀に於て士風消長の為めに軽々看過すべからざる所のものなり」少し難しいでしょうか。私の現代語訳を下に書いておきました。「勝利すれば榮譽をほしいままにする（「専らにし」）、敗北すればその苦難に甘んじるという考え（「主義」）を明瞭に打ち出すことは、士族社会の風習（「風教」）においてもきわめて大切なことである。つまりこのことこそ私（福澤）が榎本氏の出处について望む（「所望」）ところの一点だと考える理由であり、ひとり榎本氏のためというばかりではなく、国家百年の計略（「謀」）における士風の榮枯盛衰（「消長」）のために決して見捨てておくことのできない問題だ」、そういっています。このことは別に榎本のために言っているのではない。国家百年の謀、計略を考える上で見過ごすことのできない出处進退の在り方だというのが、福澤の考え方です。士風、士魂といっているわけですね。欧化主義者、啓蒙主義者、天賦人權説、社会契約説の福澤とは全く別の一面ですね。新しい政府においても、士風、士魂を失ったものがそんなことをやるべきではない、こういう気分であります。

返す刀で、今度は勝海舟の在り方をもやっつけるわけですね。これも読ませて下さ

い。1 ページの一番下ですね。これは訳がなくても分かっていただけるかと思います。

「爰に遺憾なるは、我日本国に於て今を去ること廿余年、王政維新の事起りて、その際不幸にもこの大切なる瘠我慢の一大主義を害したることあり。即ち徳川家の末路に、家臣の一部分が早く大事の去るを悟り、敵に向て曾て抵抗を試みず、ひたすら只管和を講じて自から家を解きたるは、日本の経済に於て一時の利益を成したりと雖も、數百千年養い得たる我日本武士の氣風を傷うたるの不利は決して少々ならず」。ここでも同じことですね。勝が憎くてそう言うのではない。數百千年養ってきた我日本武士の氣風を損なうことになる、そんなことが許されていいはずがないではないかと、こう言っているのですね。福澤の後年ですよ。後年の福澤がこう言っているのですね。福澤が、冒頭言ったような天賦人權説や社会契約説の持ち主と考えるのは、極めて一面的で危ないということを示しているのではないかと思います。

もう一ついってみましょうか。西郷隆盛論です。今ちょうどNHK『西郷どん』をやっているところです。言うまでもないことですが、西南戦争において大久保利通の新政府に齒向かった男が西郷です。当然のことながら、当時の政府にとってもジャーナリズムにとっても、西郷は逆賊です。

確か私の記憶では逆賊の咎が説かれたのは、帝国議会が成立するときの赦免によってですから、明治二十何年かまで彼は逆賊のままに置かれてきたわけです。西南戦争が終わって10年です。それから逆賊のままに置かれてきたわけです。ですから、次のような発言をすることは福澤には実に勇気の要ったことだろうと思うのですが、福澤は西郷だけは単純な理由で新政府に刃向かった男ではないという解釈をしているわけです。丁丑というのは要するに丁と丑ですから明治10年ですね。「明治10年丁丑公論」というのが正式なタイトルであります。そこで西郷に対する愛慕といえますか、欽慕の情を、榎本とはまるで逆の、旧社会の徳義を体現した人物としての西郷像を福澤は書くわけです。福澤がいかに西郷を高くしていたかということをお細かく書くこともできるわけですが、ここではある一文を紹介するだけで、やめます。ちょっと見てください。

「西郷は少年の時より幾多の艱難を嘗めたる者なり。学識に乏しと雖ども老練の術あり、武人なりと雖ども風彩あり、訥朴なりと雖ども粗野ならず、平生の言行温和なるのみならず、如何なる大事変に際するもその挙動綽々然として余裕あるは、人の普く知る所ならずや。…薩の士人は古来質朴率卒直を旨とし、徳川の太平二百五十余年の久しきも遂に天下一般の弊風に流れず、その精神に一種貴重元素を有する者と云うべし。…薩に居る者は依然たる薩人にして、西郷、桐野の地位に在るものにも衣食住居の素朴なる毫も旧時に異ならず」。

他にたくさん文章はあるのですが、旧社会の徳の体現者、徳義の体現者としての西郷という点を一人敢然として擁護した人物が福澤だと思われま。というわけです。

くどいようですが、天賦人權説や社会契約説で欧化主義者や文明開化論者や、そういったイメージとはまるで違う福澤像というのが浮かんでくるのではないかなと思います。

開設を前にして、自由民権運動などが起こり、その時の論争になったキーワードは国権を強化すべきか民権を強化すべきかという、二項対立的な論争であったわけです。まあ福澤といえば民権論者だというイメージを持っておられるだろうと思うのですね。であるがゆえに一万円札の肖像にもなっているのだろうと思いますが、福澤の文献を読み込んでみると、そうではないですね。国権論者なのです、彼は。福澤といえば国権よりも民権の大切さを説いた自由民権論者である、そんなようなことをいっている本が今も本屋さんで売られているのですね。いかに不勉強かなというふうに私には映るのであります。

この時福澤がどんな言を吐いたかというのが、次の文章に載っています。国権民権といいますと、一昨年(1898年)の5月でしたか成立した平和安全法制をめぐって、憲法学者、ジャーナリスト、その他が組んでえらい論争があったじゃないですか。あの時、左派が立脚したのが民権論ですよ。立憲主義という言葉を使いましたが、民権論です。恐らく彼らの頭の中には福澤のイメージが浮かんでいたと思うのですが、では当の福澤にあたってみると、全然違うのですね。もちろん自分は、民権論に反対ではないけれども、民権はただ伸長すればいいというものではないと、こう言っています。だから基本的には民権はいいものだとは言っているのです。しかしどのような国体、国体という言葉が既に出てきますが、国体の国家を建設すべきかという肝心な問題を議論するものでなければ、民権など論じても詮方無いことだというふうに福澤が言っています。西洋列強による干渉や介入が恒常化している今、ただ国会を開設すればよいという程自体は単純ではないというのが、福澤の主張なのです。だから福澤が民権主義者だというのは端から間違いだということが分かります。福澤はこうも言っています。

「俚話に、青螺が殻中に収縮して愉快安堵なりと思ひ、その安心の最中に忽ち殻外の喧嘩異常なるを聞き、窃に頭を伸ばして四方を窺えば、豈計らんや身は既にその殻と共に魚市の俎上に在りと云うことあり。国は人民の殻なり。その維持保護を忘却して可ならんや。近時の文明、世界の喧嘩、誠に異常なり。或は青螺の禍なきを期すべからず。この禍の憂うべきもの多くして之を憂る人の少なきは、記者(私、時事新報の記者)に於て再び不平なきを得ざるなり」。実に面白い表現ですね。ここでは国権こそが人民の殻だよと言っているのですね。国権がしっかりしていなければ、民権なんか成り立たないよ、ということをこういう例え話で彼は言っているわけです。ですから非常にこの福澤という男は理想主義というより、現実主義なのです。リアリスト、プラグマティストだということに私は響きます。自分が民権論者であるならばどんなによいことか。しかし現実を眺めてみるととても民権主義を主張する立場に私は

立てない。逆だ、国権主義者だと、こういう言い方になっているわけです。それはそうですよ。

ペリー来航の十数年前にはアヘン戦争が起こって、あの巨大な清国がイギリスの数隻の砲艦によって潰えてしまった。それから十数年経ってペリー来航ですね。1回目は浦賀に来ましたよね。4隻。翌年は7隻来たのですが、もう少し品川寄りに行けば、恐らく1隻に100万くらいの大砲がついていたらしいのですが、江戸領を射程距離に収めることのできる艦船で開国を要求してきます。砲艦外交そのものです。こういう時代状況の中で、とても私は民権主義なんていうのは言っていられない、むしろ国権主義の立場にあったのが福澤です。現実には即して物事の優先順位や事の軽重を伶俐に見据えるというのが福澤のスタンドポイントだったのだらうと考えるわけです。特に組織や人の上に立つリーダーは、事の軽重を見極める見識、リアリズムが必要だということを後年になるとくどいほど説くわけです。

今年は明治150年です。近代の著作のベスト10について産経新聞が掲載をしています。やはり一番は福澤ですよ。福澤の何かというと、『文明論之概略』ですね。私も福澤の本を全巻読んでみて、その議論の密度や説得力、それから文章の格調の高さ等の観点からいって、福澤の中でも別格にといいいくらいに、よくできた本がこの『文明論之概略』という本だろーと思ひます。文明化の必要性をくどいほど諄々と説いた本です。しかし、多くの研究者が意図的かもしれないが、注目していないところがあるのです。注目すべきは、この本の最後の最後なのです。私には実に鮮やかな論理の反転だと思われるのですが、こうです。

「目的を定めて文明に進むの一事あるのみ。その目的とは何ぞや。内外の区別を明にして我本国の独立を保つことなり。而してこの独立を保つるの法は文明の外に求むべからず。今の日本国人を文明に進むはこの国の独立を保たんがためのみ。故に、国の独立は目的なり、国民の文明はこの目的に達するの術なり」、こう言っているのです。内外の諸文献を引用して、いかに文明化というものが要るかということ諄々と説いた名著です。だけれども、その最後の結論は、諄々と文明化の姿勢を説いた上で、鮮やかにも反転をするのです。文明というものは、それ自体が重要だということではなく、独立を達成するために必要なものなのだということ。つまり手段が文明化、目的は独立ということですね。

そして「不羈独立」という言葉はこの文脈の中で出てくるわけです。羈(き)というのは馬を紐で止めておく杭のようなものです。誰にも拘束されないという意味なのでしょう。そして独り立つ、独立。とこういうふうになっているわけです。これが目的なわけですね、福澤の。文明化はその為の術なり、というのがそのロジックであります。最後の数行を言いたくて、福澤は諄々と文明化の必要性を説いてきたと私には思えるのです。その反転する文章の鮮やかさはどうしてみえないのかというのが、私の

気分であります。だからこの本は『文明論之概略』ではなくて、『独立論之概略』と名すべき本なのだというのが私の見立てであります。

大体そんなことを言いたかったわけですが、最後今近々の課題、朝鮮半島についてお話をしてみようと思います。と申しますのも、福澤の後半生は朝鮮問題なのですね。時事新報という新聞を彼は発刊したのですが、その論説の8割くらいは朝鮮論であります。朝鮮の近代化というのは彼の夢だったのです。ちょっと解説しますと、日本が併合した朝鮮というのは李朝、李氏朝鮮の36年ですね。しかしその李氏朝鮮は、全く独立国家ではないですよ。清韓宗属関係という言葉がありますが、要するに朝鮮にとっては清国が君主なのですね。自分はその臣下である。清国は朝鮮の宗主国であり、自らはその属領であるという構図です。朝鮮にとって中国というのはいつでも巨大な存在ですね。巨大な存在に事（つか）える、それを事大主義といいます。

事大主義の朝鮮は末期になると非常に疲弊してきて、内紛や内乱が始終起こるので。起こるとすぐに清国に連絡をして、清国から大量の清兵がやって来て、その内乱を抑えるのです。そんなことをやられたら、日本は不安で仕方ないですよ。対馬海峡を一つ渡れば九州になるわけで、やっぱり朝鮮を清国から自立させねば日本はもたない。その上で朝鮮を、我が国の維新のノウハウでもって近代化させようと。これが福澤の夢だったのではないかと思うのです。なぜそういう夢を描いたかという、分かりません。分かりませんが、私の類推からすると、福澤は明治維新の当時は幕臣だったのです。幕臣で翻訳方、要するにオランダやイギリスの文献などを翻訳して政府に出すという仕事をやっていたわけですね。だから維新には関りがなかったのです。やり過ぎたという感じでしょうか。これが福澤の相当恐らくは悔やみであって、だが今度は朝鮮の近代化に貢献しよう、というふうに、これは想像ですが、そういうふうに思いを変えていったのではないかと、私には思えるのです。

でもですね、その夢は最後に潰えるのです。現在では、外国人留学生を受け入れている大学はたくさんあるのですが、明治になって留学生を受け入れた初の大学が慶応義塾ですよ。どこの留学生を受け入れたかという、朝鮮からですね。李朝の末期のあの腐敗した政治をなんとか立て直そうと考えて、朝鮮の留学生を受け入れて、そこで維新のノウハウ等を教え込んで朝鮮に帰国させていました。門下生も一緒に渡らせる、というふうなこともやりました。ある門下生と自分とはモールス信号を使って、朝鮮は現在どんな状態にあるかが、三田に同時に入って、福澤は朝鮮の最新情報も得ているわけですね。それから別の福澤の門下生が向こうへ行って、漢字の世界ではなくて一般の人たちが読むことのできる諺文というハングルの新聞の刊行をする。それから福澤の弟子のある人が書いている文章の中に出てきているのですが、80挺の日本刀を送ったりもしているのですよ。朝鮮の近代化に関しては福澤は非常に激しいものをもっていたのです。しかし結局はこの開化派、自分が育てた者たちがクーデター

を起こしたりして、3日くらいは天下を握ったことはあるのですが、最終的には守旧的な官僚に封じ込められて、三日天下で終わってしまう。そういう夢破れた男でもあります。

現在の話になりますと、その朝鮮には、これは南北両方ともなのですが、国家間の合意とか協定とか条約というものを非常に軽視している。時にこれを覆して平気なところがありますよね。

もうご存知のことですが、北朝鮮についていえば 1994 年に米朝枠組み協定をもつくって、核開発はもうやらないとあって、軽水炉の導入という取引をしているのですが、やっぱりこの合意を破っていることはご承知のとおりですよ。これは北朝鮮の話です。今度もうまくしてやられたなというのが私の想像です。これは韓国とて同じことですね。例えば日本との関係でいいますと、日韓が国交を樹立したのは 1965 年ですよ。この時に日韓基本条約が出来たのです。これは日本の外交の中でも最も厳しい交渉だったわけですが、十何年をかけてやっと基本条約まで入った。その日韓基本条約と同時に経済協力協定・請求権協定というのが結ばれているのです。こう書いてあります。「両国間の賠償請求権は、完全かつ最終的に解決された」。だから今日本が苦しめられているような歴史認識問題というのはこれで方が付いたはずなのですよ。例えばいわゆる従軍慰安婦についてこれが問題あるならば、日本がその時に払った請求権資金の中から払うべきものですよ。そういうことを恐れていた日本政府は、したがって「完全かつ最終的に解決された」という言葉を使ったのです。こういう表現というのは国際条約に他にあるかと国際法専門の友人に聞いたら、そんなものは私の知る限りではありません、こういっているのです。「完全かつ最終的に解決された」といっても尚、次々と矢を放ってくる韓国であります。

もう一つ直近の話をしますと、一昨年 12 月に外相会談があつて、そして慰安婦問題に対する最終的な合意が出ましたよね。その合意は覚えておられると思いますが、ここでは「最終的かつ不可逆的な解決」というふうに合意したのです。ところが慰安婦問題が全然解決していないことはご承知のとおりであり、その後、元徴用工の問題も言いだしています。しかも南北間が緊張しているこの時期にあつてなおそういうことを言っている。やはり伝統を変えるということは容易なことではないというわけです。

そこで確か福澤もそんなことを言っていたよなと思ひ起こしました。先程いった開化派のクーデターに失敗して福澤の夢は破れたのですが、その破れたときに福澤は何か言っていたかという、次の文章です。

朝鮮近代化の夢破れての福澤の述懐、これは僕が付けたタイトルですが、明治 33 年に亡くなっていますから、もう最後年ですね。少し分かりづらい文章かもしれませんが、せっかくですから読んでみましょうか。

「本来朝鮮人は数百年來儒教の中毒症に陥りたる人民にして、常に道德仁義を口にしながら其衷心の腐敗醜穢、殆んど名状す可らず。上下一般、共に偽君子の巢窟にして、一人として信を置くに足るものなきは、我輩が年來の経験に徴するも明白なり。」もうほとんどヘイトスピーチなのでしょうね。「左れば斯る国人に対して如何なる約束を結ぶも、背信違約は彼等の持前にして毫も意に介することなし。既に従來の国交際上にも屢ば実験したる所なれば、朝鮮人を相手の約束ならば最初より無効のものと覚悟して、事実上に自から実を収むるの外なきのみ」。ちょっと面倒くさい文章ですが、私の現代訳が載っておりますので、それも見ておいていただければと思います。つまり、現代の日本人がほとんど感じる感覚を 120 数年前に彼は言っているわけですよ。「完全かつ最終的」といってもだめだし、「最終的かつ不可逆的な解決」といってもだめだということを、実は福澤は 120 数年前に言っているわけですよ。

もう少しだけ申し上げますと、この文章がどういう文脈で出たかということをお話します。日清戦争という戦争がありましたよね。先程も言いましたように日清戦争というのは、朝鮮と中国との君臣の関係、宗属の関係を絶たねば、日本の自立は難しいと日本の指導者が考えたからですね。だから朝鮮と中国との君臣関係、宗属関係を絶つためには日本が清国に挑まなければならない、というロジックで起こった戦争です。

その戦争に際して直接的に大義を明らかにするために、朝鮮の内政を改革すべしという提案を陸奥宗光が出すわけです、清国に対して。これは「日清共同内政改革提案」といいます。財政から教育に至るまでいろいろな近代化のための提案です。この提案をひとたび朝鮮は受け入れるのです。しかし、ひとたび受け入れたのですが、一週間くらい経たないうちにひっくり返してくるのです。この改革提案を受け入れた時の朝鮮の総理大臣は、その名前は憶えておかなくてもいいのですが、金弘集という福澤の非常に強い影響下にあった人物です。朴泳孝とか金玉均とか聞いたことがあるかもしれませんが、朝鮮近代化の志士と言われた人たちを配下に内閣をつくるのです。

しかしその内閣が組成されて「甲午改革」と称する日本の明治維新に類する改革が出発しようとしたのですが、やはりだめだったのです。だめだった理由は何かというところ、事大主義のゆえですね。ご承知と思いますが、日清戦争で日本は遼東半島、つまり遼寧省の大連や旅順があるあの半島を割譲されましたよね。台湾も割譲され膨大な賠償金も手にするわけですが、一番喉から手が出るくらい欲しかったのは、やっぱり遼東半島です。あそこを握れば要衝の地ですから、一大勢力を張ることができるのですが、三国干渉ですね。ロシア、ドイツ、フランス、この三国の干渉によって、遼東半島という日清戦争における最大の戦利品を日本は手放さざるを得なかった。これを朝鮮は見ているわけですね。なんだ、日本というのは恃(たの)むに足りない国だというふうに思うのです。ロシアの南下政策にあれほど簡単に身を任せてしまう。朝

鮮は事大の対象を清国からロシアに変えるのですね。親露派が巨大な勢力を持つわけです。閔妃暗殺なんていう恐ろしい出来事をご存知だと思いますが、閔妃というのはロシア派だったわけです。これをなんとか叩き潰さなければならないという、三浦梧楼という公使がいて、閔妃暗殺という悲劇が起こるわけですが、そういうことなのです。

なにか大きいものにいつも寄り添う。清であったり、次にはロシアであったり、日本であったり。大きいものに事（つか）えるという考え方が強い。そして日清戦争で日本は最大の戦利品を手放してしまったわけですから、日本は恃（たの）むに足らずというわけです。ずっと恃（たの）むに足る存在はロシアだと考えるようになるのです。親露派が一挙の勢力を持ってしまって日本は敗れるわけですね。そして先程少し名前を言った当時の福澤の深い思想の影響下に置かれていた金弘集という首相は、光化門の前で民衆によって撲殺されるという出来事が起こって、そして日本の提案した改革というのは廃棄されたわけですね。こういう文脈の中で福澤のこの文章が出てきた、といえば福澤の真意が分かってもらえるだろう思うのです。その辺りで福澤は朝鮮についての論説の筆を折ります。そして『脱亜論』という名説を書いたのですね。脱亜して入欧すると。そこに話がいきってしまうと非常に複雑になりますから、今日はここで納めておきたいと思います。

後半生を朝鮮の近代化にかけた福澤の、失意の論説、これが一番最後に紹介したものです。百二十余年前の福澤の絶望。これは現代人のそれにも通じるものがあると私は見えています。民意がそれほど高くもなかった時代だからでしょうか。あるいは思想的にいうとまだメジャーではない自分の思想を国民に伝えるがためになのでしょうかね。福澤の文章はとにかく激しいのですよ。私は激語と呼んでいますが、激語なのです。だからその文脈においてはヘイトスピーチに近いようなものが出てきてしまっているというわけです。しかしそういう介在物をすべて排してみれば、真実を突いている論説なのだというふうに私は思います。

以上で終わりですが、冒頭申し上げたような文明開化論者や啓蒙思想家、穏やかな福澤というのが本当の福澤であったかのように受け取られているのだけれど、私のみる福澤はそれとは対極的な存在だったということを主張したかったのです。今明治150年で日本人として何をやらなきゃならないのかというのは、やはり憲法九条の改正はもとよりですが、その主張をするのに一番の論拠になり得るものが福澤の思想の中にはあるのではないかなというふうに私は感じています。私は人間が進歩するとか、あるいは人間の思想が進歩するとか、そういう考え方を持ったことは全然ないのですよね。進歩したのは情報技術であるとか運送の技術であるとか、まあついていけないスピードで変化していますが、これはただ表層の変化にしか過ぎない。人間の存在、それを支える思想というものはそんなに簡単に進歩するものではないというふうに思

っていますが、福澤を読むとやはりつくづくそう感じさせられます。

明治150年ということですから、150年前に論説を繁くふるった思想家に戻って時代と社会を考察するという視点が今必要なのだろうと思います。以上です。ご清聴ありがとうございました。

(平成30年3月14日開催)